

市長定例記者会見 ２０１０年４月２７日

・日 時 平成２２年４月２７日（火）午前１０時３０分～

・場 所 本館３階第１会議室

・記者数 １３人

議題 「ふるさと納税」について

「松山島博覧会」について

（市長）

本日はまず、ふるさと納税について平成２１年度の寄附実績などを説明させていただきます。

ふるさと納税は平成２０年度から始まりましたが、本市におきましては、「坂の上の雲のまち松山応援寄附金」として取り組んでまいりまして、全国の多くの方々から心温まる寄附をいただいております。

平成２１年度の寄附実績ですが、２４８件、金額は８２７万２，２５５円の寄附をいただきました。前年度と比べましても件数・金額とも増加しており、大変ありがたく、寄附していただいた皆さんに心からお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。併せて、松山の発展を願う、松山を応援する方が、これほど多くいらっしゃるというその期待に、しっかりと応えていかなければならないと、心を新たにしているところでございます。

なお増加した理由は、前年に続いて、東京の松山愛郷会、各地の愛媛県人会などを通じたお願い、インターネットなどさまざまな媒体を活用してのお願いが、『坂の上の雲』のまちづくりや松山の観光、まつやま農林水産物ブランド品など松山の魅力とともに、皆さんに伝わったのではないかと受け止めております。

寄附金の充当状況でございますが、寄附をいただいた方々から指定のあったテーマに沿って、昨年度に実施した１６項目の事業に充てさせていただきました。また、この寄附をいただきました方々へは、充当した事業の内容や成果をご報告することとしておりまして、広報紙やホームページでも寄附実績や充当の状況などを公表することとしております。

ふるさと納税は、寄附をいただくことのほかに、市の施策やまちづくりを全国へ発信するということにも大きな意義があり、今年はスペシャルドラマ「坂の上の雲」も放送２年目となりますことから、本市の魅力・話題を広く全国へＰＲし、より多くの方に松山のまちづくりを知っていただき、また応援もしていただけるよう呼び掛けを強めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

次に、松山島博覧会について説明させていただきます。

いよいよ、４月２９日に松山島博覧会のオープニングイベントを迎えることとなりました。

松山島博覧会の開催の背景には、平成１７年１月の合併があります。この合併により本市は、興居島、釣島の２島に加え、旧北条市からは安居島が、また旧中島町からは睦月島、野忽那島、中島、怒和島、津和地島、二神島の６島が新たに加わりまして、美しい自然に包まれた個性豊かな島文化を味わうことができる有人島９島を擁することとなりました。その一方、島しょ部においては、過疎化・高齢化による人口減少などにより、地域の活力低下が進んでいる状況となっております。

そこで本市では、島の振興を図り、活力を再生するために「みんなのまつやま夢工房」からの提言をもとに、島の方々が主体となって取り組む松山島博覧会を開催することにしましたのであります。

この松山島博覧会の開催に向けては、どうすれば自分たちが住む島がもっと良くなるだろうかということ島の人々自らが中心になって、島にしかない豊かな自然や農産物・水産物、また歴史や文化遺産など、そして何より興居島の島四国やトライアスロン中島大会でのおもてなしに象徴される島の人情など、島しょ部が有する固有の資源を最大限に活用する、島ならではの数々の体験メニューなどを生みしました。

この出来上がったメニューには、島を訪れた方々に島でしか感じられない、ありのままの心地良さを体験してもらい、楽しんでもらうことで、島を元気にしたいという島の方々の思いが込められております。その思いがたくさん詰まった、しまはく公式ガイドブックが今皆さんのお手元にある「島ＬＯＶＥ」でございます。この「島ＬＯＶＥ」には、４月から１０月までの毎週末に開催されるイベントや体験メニューなどが満載されております。是非このしまはく開催期間中にできるだけ多くの方々に島を訪れていただき、島しょ部の魅力を堪能していただければと考えております。

大切なことは、この松山島博覧会を一過性のイベントとして終わらせないということであり、松山島博覧会は、あくまでも多くの方々に島の魅力を知ってもらうためのきっかけづくりとして位置付けており、この松山島博覧会の開催で生まれたさまざまな取り組みを継続していくことこそが重要であると考えております。まちづくりの主演は、そこに住む人々。島の人たちが結集して、自ら立ち上がり、新しいことにチャレンジして、終了後もこの取り組みを継続していくことが、島の活性化につながるものと信じております。

詳細については、担当から説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

（記者）

島で暮らす方の仕事は農業や漁業が大半だと思うが、松山島博覧会が終わった後に、どういう経済圏をつくっていくのか、ビジョンはあるか。

（市長）

まず、これは合併の時にさかのぼらなければならないと思うのですが、私どもは、どうしても本市のいきさつからしても編入合併の経験がなく、合併して一緒になるとその町の名前が消えるということもあって、こちらからの呼び掛けはしませんでした。

そういう状況の中で、将来のことを考えたら、どう考えてもこのままでは行政運営を続けていけないだろうという判断をされて、本市に合併の話をされたのが中島町と北条市でした。

ある意味ではもうどうしようもないだろうという前提での話がスタートし、当時、島は元気が無く、合併で中島も駄目になっていくのではないかという空気が非常に漂っていました。

それはまずい、そうではないんだ。松山の扉をたたいて、合併していただいたからには、合併して良かったと思っていただけるような施策を展開しようというのが基本にありました。

水の問題、学校の問題、病院の建て替え、それから中島汽船の民営化、いろいろな課題にこの5年間で取り組み、先般は救急車搭載型の消防艇も運用を開始し、もちろん全員ではないですが、松山市は島のいろいろなことに気を配りしっかり見ているなというイメージは出来てきていると思います。

そうした中、もう一つの課題は住民自らが、島の皆さんに多少沈滞ムードが漂っていたので、実は失礼だったかもしれないのですが、新松山市では住民の皆さんがすべてです、皆さんが前を向いてやる気になっていただいたらバックアップします。待っていたら行政からあれを、これをというのはないんです。なぜならば、それはまちづくりの結果として見たら、いい効果を表すことはないだろう。あくまでも住民の皆さんが立ち上がればの話です、ということはずっと言い続けてきました。

そうすると、各島の方々がネットワークを形成するようになり、島の活性化を自ら考えようという動きが出てきました。幸いなことに先ほど申し上げた「みんなのまつやま夢工房」という事業、これは公募した市民の皆さんがテーマに沿って1年間かけて議論していただき、政策の提言をしていただくという事業ですが、そのときに島の問題が取り上げられ、島での博覧会が一つの起爆剤になるのではないかというものでした。それで先ほどの方々に、しまはくに向けて頑張ろうという機運が生まれたのです。島の皆さんが主体になるということであれば、市も全面的に一緒に頑張ります、といういきさつで今回を迎え、そして、松山島博覧会が開催されます。

今までは、中島町だけの力でPRするしか出来ませんでした。合併したことによって、本市の広報で常時PRが出来ます。これは、大変大きな効果につながると思います。もちろんマスコミの皆さんも、いいものであれば取り上げていただけると思いますから、そうすることで島にスポットライトを当てていく大きな力になると思います。

大事なことは、観光だけを目的にしているのではなく、例えば今回をきっかけに、意外と市民の皆さんもこれだけ島に近いにもかかわらず行ったことがないという人が多いようです。この松山島博覧会というイベントを通じて観光客の方も市民の方も島に足を延ばしていただく。そして、島の一番の魅力というのは文化や農産物・水産物、それから自然・風景です。例えば中島産ブランドもたくさんあります。かつてはミカンも「まるなか」といって市場でも高い評価を受けていました。非常に質の高いミカンの産地でもあります。農協の合併によって、このブランドは無くなりました。でも、昔から島で採れるミカンは、傾斜の度合いと海からの太陽の照り返しの関係もあり糖度があります。ですから新鮮な水産物も含め、島に行けば実際に食べられる機会を得るわけです。ここが大事なところで、その人たちこそ、次なるお客さんです。「島に行って食べてみたけどおいしかったね」。そこで島の人は、その人たちをお客さんとして、顧客管理をしたたらどうか、そのような話もさせていただき

ました。

島のファンをつくること、それから島の農水産物の顧客をつくること、それを最大の目的にしたらいいのではないかと考えています。

（記者）

一般的に博覧会は、開催期間中の入場者数によって成功したかどうか判定することがあるが、松山島博覧会は島に渡ってもらうとか、農水産物を買ったり食べたりしてもらうということが目的か。

（市長）

多くの方を引き付けるために毎週末どこかの島で何かのイベントを開催するようになっています。それも大々的なモニュメントを造るとか、施設を造るとかではなく、今ある生の中島の良さを人の力でコーディネートしていくというのをメインにしていますから、そういう意味では他の博覧会、名称は博覧会になっていますが、おっしゃるように意味合いは違うと思います。

（記者）

松山島博覧会の成果を判定する基準はあるのか。

（市長）

人数については目標を掲げています。ただし、先ほども申し上げたように、島のいいものがアピールしきれてないということがありますから、当初から申し上げてきたのは、中島のお客さんをつくる、先ほどの農林水産物の話ではありませんが、そこも大きな目的の一つとして考えることが、松山島博覧会をより効果ならしめることにつながるという話で進んでいます。

人数については、どうしても船のキャパの問題などもありますから、驚くような数字にはなりません。しかし、今回イベントに参加される方やボランティアで参加される方については、行きの乗船代は出していただきますが帰りの乗船代は無料という仕組みもつくっています。

（記者）

市議会議員選挙の投票率の低さや開票結果についてどう考えるか。

（市長）

私の選挙ではなく、有権者である皆さんの判断でありますから、特にコメントはありませんが、世の中が大きく変わっている状況の中、昨年もその前からも大きなテーマになっていたのが地方分権という課題で、今までの発想とは違った地方の有り様というのが問われていると思います。その中で地方自治体は、地域主権を求めて権限・財源の移譲ということを国に突きつけるというような行動を、全国知事会も全国市長会も含めて展開してきています。

ある意味では国と地方の仕事の役割分担を明確化し、財源の裏づけも含めて地方で出来る

ことは全部地方でやりましょうという願いを含めた運動であります。ポイントは、役割分担ですから、ともすれば今まで国・地方は上下関係のように見られることが多かったのですが、そうではなく、役割分担ですから上下というのではなく、対等な立ち位置に立って、その代わりに地方は自立心を高めて責任感も強めて、そういう覚悟を持った行政運営を行っていくという気概を持つことで進んでいるわけです。

一方、地方議会はもちろん組織政党、全体の組織で動いている政党は別ですが、大半は個人後援会を中心とする議員が多いのですが、しかしながらよく検証してみると所属政党のピラミッド構造の組織体の一員としての活動の枠からはみ出すことがない状況にあると思います。

でも本当は地方で選ばれる議員ですから、主役、主舞台はあくまでも地方のはずです。昨年この議論をさせていただきましたが、地方を主軸にした立ち位置を持った活動というものが、これからの地方分権時代には重要になってくると思うのですが、片や対等な位置に立つぞという気概を持ってやっている、片やあくまでも所属政党の下部組織という中での行動の制限が掛かっている、そうすると話がかみ合わないケースが出てくると思います。そうした流れから、例えば大阪のようにローカルパーティーが産声を上げたり、いろいろな行動が地方分権の時代を受けて地方議会でも始まりつつあるわけです。

ですから今回どのようなお考えなのか私には分かりませんが、そうした今の時代の流れというものをきちんと見据えて立ち位置はどこなんだろうということで行動される方々がたくさん出てくれば、当然のことながら住民の関心も高まってくると思いますし、非常に地方分権時代に即した地方政治家の活動というのが目に見え、そして関心が高まるということにつながっていくのではないかと考えています。

（記者）

市議会議員選挙で今回も票の集計でミスがあったが、どう考えるか。

（市長）

選挙管理委員会のミスについては、率直にお詫びを申し上げます。ただ今回、非常に苦しかったのは、国の予算についてですが、ご案内のとおり事業仕分けで予算の削減をしつつもスピードを上げろという、大変厳しいハードルに選挙管理委員会の職員が挑んでいたのは事実です。ですから途中で経費の削減のために機械を他の自治体からお借りしたり、いろいろな工夫をしてきました。

ただ、集計のところで不在者投票を二重カウントしてしまったことについては、明らかにミスですから、これについてはお詫びを申し上げて、なぜこういうことが起こったのか、どうすれば次から起こらないように出来るのか、参議院選挙も控えていますので、ミスのない、より精度の高い選挙管理委員会になる力にさせていただきたいと思いますので、お詫びを申し上げるとともに、必ず次の選挙ではさらなる成長を現場はしてくれると信じています。ぜひ見つめていただきたいと思いますと思っています。

(記者)

北条地域の振興はどう考えているか。

(市長)

北条はまずこの5年間に、合併協議会の前にはいただいていた問題点以上の問題点が結構見つかりまして、それは水の問題でした。例えば光洋台という大きな団地がありますが、この水道施設は老朽化して大変な状況にありました。それから配水管も非常に古く全面入れ替えをしないとイケないものもあり、さらに漏水率が非常に高かったので、漏水対策にも踏み込んでいかねばならない状況でした。水道事業というのはほとんど地下ですから、なかなか住民の皆さんの目に見えないところがあります。でも、実は莫大な費用が掛かりますが、人の命に、生活にも懸かってきますから、この5年間は最優先で取り組んできたので、住民の皆さんに受け止めていただけているかどうかは別として、効果はあったと思います。合併前と比べたら、かなり水道の整備は進んだと思います。もう一つは、これは計画の中にもあるのですが、北部のスポーツ・レクリエーション促進エリアの拠点としての北条の位置付け、これについても整備が着々と進んでおりまして、来春には新しい体育館も供用開始となり、フットサルコートそれから人工芝の球技場、それから陸上競技場の整備とその内側にある天然芝の整備、クラブハウスの建設。松山市全体を見た場合、かつては堀之内公園にスポーツ施設がありましたが市坪に移転しました。これは南部に移転をしたことになります。すなわち北部の方々からすれば、非常に遠くなったのです。それから、本市の人口規模ですから、北部地域をカバーするスポーツ施設、拠点を整備するというのが、まず北条地域の一つの魅力につながるのではないかと考えていましたので、水道問題の解決とスポーツ施設の整備、ここが一つ大きなテーマでありました。

それとまた、これも少しずつですが先ほど申し上げましたように地域の魅力を輝かしていくというのは住民パワーだと思います。北条には河野氏の歴史がありますから、これを松山とリンクさせるような事業をしていく、目に見えるような成果があったかということ、まだまだそこまでは行っていません。時間は掛かると思います。『坂の上の雲』にしても10年かかったわけですから、いろいろな仕掛けをたくさんして、特に河野氏というのは、松山市全体の、道後の歴史を考えるとときには、決して外せません。かつて、河野水軍は北条で興りましたが、その後、松山に移り住み、今の道後公園に拠点となる湯築城を構えたそうです。市内の至る所に出城があり、そういう歴史は全部北条を発信してからつながっていきますから、こうした歴史や文化を磨いていくことは今後も続けていきたいと思っています。

それからもう一つは、道の駅風和里ですが非常にいい運営をさせていただいておりますので、これも北条の魅力の一つになってくると思いますし、そこから見る夕日も観光スポットの一つとしてももう少し売り出してみたいと、今後どうなるかは別として、個人的には思っています。

さらには愛媛マラソンがあります。愛媛マラソンの折り返し点は土佐礼子さんの出身地である北条地区であり、その地域で折り返すというのが念願でありました。先般の愛媛マラソン大会では、北条地区の多くの方々がボランティアとしてご活躍していただき、おそらく愛

媛マラソンは北条地域の非常に大きな、中島トライアスロンに匹敵するような、ふるさとイベントという位置付けになってくるのではないかなと思っています。

（記者）

市長の任期は残すところ1年となったが、力を入れていきたい施策は。

（市長）

まだ1年、たっぷり時間はあると思いますが、やはり何とか水問題の解決に向けて前進を図ることができないかと、今の段階ではまだまったく先が見えませんが、都市の安全と水問題の解決に向けて全力を尽くすというのが、今の私にとっての最大の課題です。

（記者）

名古屋や大阪では地域政党の動きが活発だが、どう考えているか。

（市長）

名古屋市や大阪府の場合は、首長が先頭に立って行動を起こしていますが、私はその動きそのものについては地方分権、地方主権の時代を迎えて好ましいというか、地域を軸にする、例えば大阪維新の会は自民党に籍があっても参加しています。離党した人も参加しています。だからどこかの政党に属していても国政は国政。国政は、皆さんもご存知のとおり、衆議院では小選挙区制という選挙戦で選出されますから、常に政権選択の選挙を戦うわけです。これは制度上当たり前で、常に政権交代が起こる可能性を秘めています。ということは、その結果を地方に持ってこられたら何が起こるか。常に市民を分断するということを政治が強要するということになっていくのです。でも、まちづくりというのはそれと別の世界であって、市民の皆さんの中には共産党・自民党・公明党・民主党などの各政党の支持者がいます。それらの垣根を越えてできるだけ多くの合意を得ながら、全員とは言いませんが、合意を得ながらみんなでまちを、共有するこのふるさとをつくっていきましょうというのが仕事です。だからまったく次元の違う舞台です。

ところが今申し上げたように、ただ単に国政選挙の常に政権選択を求められる対立構図を、自分達の勢力拡大の投影として地域に持ってくるっていうのはおかしい。もちろん地方議員さん、それぞれの政党に属しており国政選挙のときは、応援するということは分かるのですが、でも一番大事なことは今申し上げたようなまちづくりですから、そこはそこだということで地域を第一に考え、政党とはいいいながら一線を引いて、国政選挙になったらせ参じるが日頃は地域を第一に考えるという会派が誕生しているわけです。これはまさに地方分権・地方主権の時代に非常に適合した動きだと思います。

私はそのお二人のように自ら先頭に立ってという考えとは少し違って、むしろそういうのは期待です。やはりその主人公である地方議員さんが考えるべき課題だと思います。地方自治体は今、国と協議していますから、先ほど申し上げたようなピラミッド組織の一員が本当の地方議員の立ち位置なのかどうかというのを一人一人が考えるという時期が来ているのではないかと思います。そこに気付かれた方は新たな行動を起こすのかもしれないし、また

今の 方が慣れているから楽だとそのまま行ってしまうのかもしれないし、それは私にも分かりません。

（記者）

昨年の衆議院総選挙の開票作業であれだけ大きなミスがあって、今回の市議会議員選挙でも投票率の訂正につながるような重大ミスがまた起こるというのは通常考えられないが、次の参議院選挙の開票作業に向けて具体的にどう改善するのか。

（市長）

すぐに原因を調べて、原因が分かり次第結果などを発表させます。